

フロンティア

国際会計事務所のデロイトによると、未上場で推定時価総額が10億ドル（約1130億円）を超える「ユニコーン」の8割は米国と中国に集中する。スタートアップ企業が育つ環境が整った都市のランキングで上位に並ぶのはシリコンバレーやボストン、北京、上海など米中の都市だ。この2カ国の最新動向を常に把握し、有望なベンチャー企業に真っ先に投資できるパイプを持っていないと、世界のベンチャーキャピタル（VC）が高い投資利回りをあげるのは難しくなりつつある。

こうした現状を象徴するような

競り勝つ「ユニコーン」投資

シンガポールVC、結節点強み

VCがシンガポールにある。2005年にフィニアン・タン氏らが創設したビッカーズ・ベンチャー・パートナーズだ。タン氏は中国のインターネット検索大手、百度（バイドゥ）が05年に米ナスダック市場に上場する前に、いち早く投資していたことで知られる。現在のビッカーズはシンガポールに加え、ニューヨークやサンディエゴ、上海、香港に拠点を置く。年間約3000社の米中や東南アジアのスタートアップをふるいにかけて、約10社に投資する。

投資先の1つが米国のバイオ関連企業、サムメッドだ。サンディ

エゴに常駐する幹部が発掘し、10%強の株式を持つこのスタートアップの企業価値は創業から10年未満で100億ドルを超えた。

ビッカーズは10月に5つ目となる2億3000万ドル（約260億円）のファンドを立ち上げた。来年にはサンフランシスコにも拠点をつくり、シリコンバレーの情報収集を強化する。最も有望な投資分野の1つに位置づけるのが、サムメッドのようなバイオ関連企業だ。医療の進歩に寄与する生物工学などは流行に左右されず、今後も高い成長が見込めるとみている。

シンガポール政府は自国のスタ



ビッカーズのタン会長はバイオを有望な投資先と位置づける

ートアップ育成に力を入れるものの、人口わずか560万人と経済規模が小さく、有望なスタートアップもどうしても限られる。だがアジアの金融や情報の結節点としての強みを生かして世界の成長の果実を吸い上げれば、投資業も十分成り立つ。ビッカーズのようなVCの隆盛は、小国・シンガポールの成長モデルのあり方も映している。（シンガポール＝中野貴司）